



第37回 鹿児島ブロック大会 in 徳之島

主催：社団法人 奄美大島青年会議所

南海日日新聞 2011年6月13日(月)

去る6月11日・12日、徳之島町文化会館にて、日本青年会議所九州地区鹿児島ブロック協議会・奄美青年会議所主催の第37回鹿児島ブロック大会in徳之島が開催されました。『地域の自立』をテーマに、講演会やパネルディスカッション、闘牛大会(伊藤観光ドーム闘牛場)、チャリティーライブなどが行われました。局長はブロック大会記念事業の一環として講演と空手演武を行い、大会を盛り上げました。

表紙でご紹介できなかった実行委員の方々への座右の銘をご紹介します。

副実行委員長 鶴野達也さんの座右の銘
感謝の気持ちを忘れず日々努力

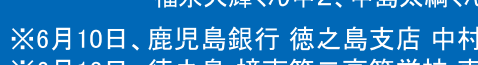
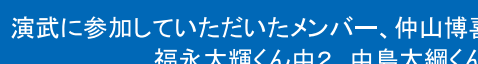
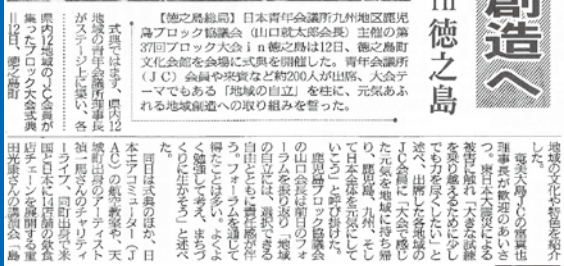
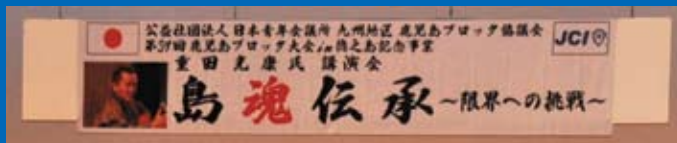
いもあることを、あたりまえのことだと思わず、「生かされていることにありがたい」という感謝の気持ちがあれば、必ず日々懸命に生きることができると信じています。

広報担当 松村大吾さんの座右の銘
人間万事塞翁が馬

【じんかんばんじさいおうがうま】人間の吉凶や禍福は、転変きわまりがないことをいう。

式典担当 盛 勇樹さんの座右の銘
出会いは偶然 別れは必然

出会いは偶然であるが、別れには何かの原因がある。



パネルディスカッション 闘牛大会 空手演武

演武に参加していただいたメンバー、仲山博喜さん39歳、米田俊郎さん50歳、原田光さん50歳、松田晋児さん44歳 福永大輝くん中2、中島太綱くん中1、中島真夏くん小5、皆様ありがとうございました。

※6月10日、鹿児島銀行 徳之島支店 中村支店長様大変お世話になりました。ありがとうございました。

※6月13日、徳之島 樟南第二高等学校 東良治教頭先生大変お世話になりました。ありがとうございました。

がんばろう東北、がんばろう日本！新極真会復興支援ボランティア活動



武田幸三さんと吉本興業のタレントの方々 昼食の炊き出し 緑代表が直接、少年部の演武の指導 被災者のみなさんの前で演武会

新極真会は4月29日に宮城県女川町の災害避難所である女川町総合体育館で復興支援ボランティア活動として、昼食の炊き出しと演武会をおこないました。女川町は特に被害が強い地域で高台の体育館を少し下ると、激しい津波の跡が生々しく残っていました。

新極真会から緑代表、三好副代表をはじめとして、藤原、木元、 incoming、山本、川原、木浪、小泉、杉原、小林(清亮)、飯沼、佐藤、鳴海、小井各支部長責任者が参加しました。また、地元宮城の金田和美支部長は多数の道場生を引き連れて参加しました。

炊き出しの TENT 設置、輸送は奥井建設(奥井社長)、料理は飲食店を経営する(株)ブルーム(平古場社長)と和ごころ あまみ(叶社長)が担当してくださり、プロの料理を被災者の皆様に提供することができました。また武田幸三さんが所属する吉本興業のタレントさんを引き連れて合流しました。

午前10時過ぎから、炊き出しの準備と、日の丸と日本地図に「負けじ魂」と書かれたTシャツを100枚配布しました。Tシャツの配布を開始すると、あっという間に行列ができ、瞬間になくなってしまいました。

昼食の炊き出しでは雑炊とカレーうどんを提供しました。同時に避難所で不足しがちなという生野菜の配布もおこないました。この昼食の提供時には鹿児島島の前衆議院議員やすおか興治先生が応援に駆けつけてくださいました。



新撰組同志会 総本部事務局 横田

東日本大震災 ボランティア活動 (2011年5月28日~6月5日) 小林 裕子



3月11日、東北地方を中心とする東日本でマグニチュード9.0の大震災が起こった。2万3000名以上の死者、行方不明者、また地震の影響により原子力発電所のマルチダウンと放射能漏れにより、避難を余儀なくされている方が約11万人。震災から早4ヶ月経った今は少しずつ復興の兆しを見始めるものの、第2災害として沢山の被害が起きている。

震災以来、何もできない自分に苛立ちを覚え、何度か帰国してボランティアに参加しようかと思いつつも飛行機チケットの値段(当時は1000ドル前後)をみても、なかなか行動に移せないうちに。そんな最中、夜中に母親から1本の電話があり、祖母が危篤という知らせを受けた。翌朝には飛行機に飛び乗り実家に帰った。祖母は2週間ほど生死をさまよったものの、何とか命をとりとめてくれた。そして、施設に戻ったのを機に、私は今回の震災のボランティア活動に参加する手続きをした。今考えると神様はなんと自然に私をこの状況下において下さったのだろうと感謝してしまう。アメリカにいた頃はあんなにも飛行機代を気にして動けなかった私が、祖母の危篤という私の中では何よりも大切な家族を通じ、この思いを叶えてくださったのだから。

私が今回参加したボランティアグループは東京、原宿に拠点を置く、ADRA JAPAN というキリスト教の精神に基づいた団体であったが、オフィスに着いた際このボランティア会社のパンフレットを見て驚いた。そのパンフレットに書かれていた言葉、それは「Changing the world one life at the time ひとつの命から世界を変える」というものであった。今私が導かれメンバーとして参加させてもらっている Victory Church でいつも言っている言葉、それは「We are changing the world one soul at the time!」

「なんという偶然だろう。私はこの素晴らしい運命に心から感謝した。今回のボランティア活動で知ったこと。それは、市町村の職員さん達も震災の被災者でありながら、被災者扱いをされないということ。自衛隊も色んなボランティア団体も市民を助けにきた!というけれど、市町村の職員さん達は被災者扱いされず、働かなければ



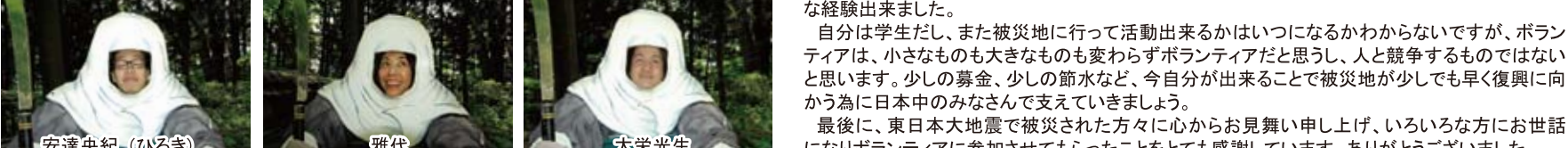
ボランティア団体の宿舎 仮設住宅地 ADRA 食堂 食料置き場 ADRA 食堂 調理場 ボランティアのメンバーが綴ったメッセージ 自衛隊から ADRA JAPAN に寄附された軍用車

東日本大震災復興ボランティアに参加して 安達央紀

今回の東日本大震災のボランティアに参加でき、本当にありがたいと思いました。以前は震災の被害状況などニュースで見てすごく悲惨な事件だなど、どこか他人目線で思っていました。しかし、実際に岩手県陸前高田市や大槌町に行き津波と地震により被災した現状をリアルタイムで体で感じ、テレビのニュースでは伝わらないものを全身で感じることができました。ボランティアの初日で被災地である陸前高田市に到着し、重機では処理できない細い細いがれきなどを人の手で掃除する作業をした時は、たくさんの人たちがボランティアを通して同じ気持ちでつながり個々が一つとなって助け合えば大きな力になるんだと知ることができました。掃除をしている途中、津波により流された物の中には写真や衣類などもあり、とても胸が苦しくなりましたが、二日目の作業を手伝った大槌町では、この現状でも強く生きている地元究の住民の人たちが、作業の最後に、一緒に作業したボランティアの人たち一人一人に「ありがとう。」と書いてくれました。逆に自分自身が勇気ももらいました。これからは今の自分の生活を少しでも見直し考え行動したいと思います。

五月中旬、東北の瓦礫の除去や被災された方々の家周辺の清掃などをさせていただくボランティアに参加させていただくことになり、岩手県に行きました。テレビでは少しは見てはいましたが、現実に見る被災地の現状は本当に声にならないくらいひどいものでした。自家用車や大人の男性4〜5人でようやく運びだせる大木などが、信じられない角度で横転しているのは当たり前で、また臭いというも伝えないことはできません。驚かされました。家や車はもちろんですが、軽油やガソリン、海産物が打ち上げられ腐り放置され、ものすごいにおいが漂っていました。瓦礫の除去をさせてもらった田んぼの方も、アルミや洋服、子供のおもちゃ、食器などが散乱していました。次の日は被災された方の家を清掃するのをお手伝いさせていただきましたが、実際にその家の方もいっしょにやって本当になんて声をかけているかわからず、声をかけることはできませんでした。けれど、どんな些細なことでも感謝してくれるし、帰る前には本当にたくさんのお礼を言っていました。帰りのときも、仙台の海岸沿いを見て、津波の猛威を受けたとても悲惨な街が今でもどこかに鮮明に刻まれ本当に一生忘れることはないと思います。

このボランティアを経験して、本当にたくさんの方々が前を向き力を合わせている姿をみて、元気を逆にもらった気がしました。今大学四年でいるなど悩んでいたけど、本当に被災した方々に比べればたいたことではないし、生きていることに感謝して、前を向き生きたいとなつた感じがしました。本当に本当に小さなことしか出来なかったけど、これまでの人生の中で一番大きな経験出来ました。



安達央紀 (ひろき) 雅代 大栄光生

謹謝台湾！ 有限会社 ゼネガー 代表取締役 下城敦司

五月初旬に台湾を訪れ、想うところ寄稿させていただきます。初めて訪台だったのですが、かねてより小林よしのり先生を私淑しており、台湾については先生の著作を通じ、日本の統治前・統治後、そして日本が中華民国に敗戦し台湾の主権を放棄するに至るまでの台湾と、中国の間で台湾が実効支配している地域の主権・領有を巡り、今日まで鋭く対立している経緯についてはそれなりに理解していましたが、台湾の人々が日本人に対して抱く尋常ならざる好感と親近感を滞在中に肌で感じ、世界一の親日国家*、というよりは唯一無二の愛日国家である台湾がどのように形成されてきたのかを今一度紐解いてみたいという気持ちで日本に帰って来、台湾でお世話になった方々、日本へ義援金を送っていただいた方々へ感謝の念を込め、皮相的な論議の展開と恥じつつも寄稿させていただきます。未曾有の震災に遭った日本に対して世界各国の個人・民間団体から続々と義援金が寄せられ、報道によると台湾130億円 アメリカ90億円 韓国16億円 中国3億円(3月末時点)と国別では台湾からの義援金が出し、巨額の義援金は日本国民の耳目を集めました。平均年収約160万円 人口約2,300万人の小国台湾にあって、130億円という金額は所得水準、人口規模からして正に破格であり、多くの日本人は困難に陥った日本に対し台湾の人々が示した胸の情に心を動かされたのではないのでしょうか。

側聞の情とは、武士を中心とした日本の美徳・精神性を象徴する故事成句の中の一つで、困っている人や弱者に対し深い同情、憐れみを感じ、自分の事のように心を痛めるといった意味ですが、かつての日本人が有していた側聞の情が台湾から日本に寄せられたことは歴史の因果というよりほかなりません。日清戦争後、台湾は清国より割譲され日本の一部となり、そしてこの地の人々は日本人、日本国民として50年に渡り同じ歴史を歩み、運命を共にしました。清国が化外の地と呼んだ台湾に近代社会を確立すべく司法・立法・行政の制度を敷くともに、風土病の根絶に取り組み、医療及び上下水道の整備、衛生設備の充実と心血を注いだ日本人がもたらした台湾にいました。産業基盤である電力、水利灌漑事業などのインフラ整備で、各種産業の育成・発展に情熱を傾けた日本人がもたらした台湾にいました。命を落とさずに教育を普及させた日本の教育者(六士先生)がもたらした台湾にいました。台湾には ~の父 と尊敬され今に至る

